

IFN・Ribavirin 併用療法は、従来の単独療法よりも明らかに HCVRNA 陰性化が高率である。

## 16 当院におけるインターフェロン・リバビリン併用症例の検討

瀧本 光弘・坂内 均・渡辺 俊明  
済生会三条病院消化器科

C型慢性肝炎のインターフェロン単独療法では難治とされている genotype I b・高ウイルス量群でも、インターフェロン・レボトル併用療法は、効果が期待できるとされている。2001年12月～2003年2月までの間に、当院においてインターフェロン・リバビリン併用療法を施行したC型慢性肝炎患者、25例を対象とし集計解析した。インターフェロン再投与例が9例、初回投与例16例で、HCV genotypeはI b 22例、II a 2例、II b 1例であった。治療終了後24週を経過し効果判定を行った例が9例、治療中止が8例であった。CR 5例、BR 1例、NR 3例で、中止例でも1例CRとなっていた。

当院で以前施行したイントロンA単独療法と比較し、ウイルス量と治療効果について解析した。I b高ウイルス量群では単独療法と比較し治療効果は良好であった。II a, II b高ウイルス量群でも同様であった。CR例では全例で、治療開始12週後までにHCV RNAは陰性化した。投与中止例は単独療法と比較し頻度が高かった。

## 17 IFN, リバビリン併用療法後期より悪性貧血を呈した慢性C型肝炎の1例

眞田 文博・山崎 和彦・三木 巖  
伊藤 信市・若林 博人・三留 正成\*  
上遠野武文\*

竹田総合病院消化器科  
同 血液内科\*

今回私たちはIFN, リバビリン併用療法後期に悪性貧血を呈したC型肝炎の1例を経験した。

症例は50歳の女性で、輸血歴・手術歴は無く、

弟が1型糖尿病、父が悪性貧血(胃切除歴なし)と自己免疫疾患の濃厚な家族歴を有していた。

IFN, リバビリン併用療法を導入した後、副作用と思われる軽度貧血を認めたが、減量、中止により改善していた。

6ヶ月間の治療によりHCV-RNAは検出感度以下とC型肝炎に対する治療は成功したが、終了1ヵ月後に急激なLDHの増加と汎血球減少の出現を認めた。

身体所見、血液検査、骨髄穿刺により悪性貧血と診断、治療により著明な改善を認めた。IFNは自己免疫疾患の悪化をきたすことが知られているが、悪性貧血を顕在化させた症例の報告はなく、貴重な症例と考え報告する。

## 18 インターフェロン治療後に発症したC型肝炎細胞癌の検討

大嶋 一美・夏井 正明・姉崎 一弥  
原 秀範・塚田 芳久・関根 輝夫  
小山俊太郎\*・下田 聡\*・清野 康夫\*\*  
中川 範人\*\*・齋藤 明\*\*  
若木 邦彦\*\*\*・須田 剛士\*\*\*\*

県立新発田病院内科

同 外科\*

同 放射線科\*\*

同 病理\*\*\*

新潟大学大学院医歯学総合研究科

消化器内科学分野\*\*\*\*

1991年8月から1999年8月までに当院にてインターフェロン(以下IFN)治療を行い、3年以上経過観察できたC型肝炎44例について検討した。治療例44例中肝細胞癌の発生は4例(9%)で、男性3例、女性1例で治療後32ヵ月から119ヵ月後に発症した。これら4例の治療効果はCRが1例、NRが3例であった。肝組織の経時的変化を見るとCR症例では治療後も線維化の残存を認めた。NRの3例中2例は肝組織の改善は見られなかったが、1例では一時線維化の改善を認めた。肝細胞癌の治療は4例中1例で内科的治療を行い、3例は外科的切除を行った。慢性肝炎の活動性がIFN治療で抑制できたことが治